
俺と魔法と異世界と！

戸豆腐 犬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と魔法と異世界と！

【Nコード】

N1990Y

【作者名】

戸豆腐 犬太郎

【あらすじ】

初投稿作品です！ちよつと意味わかんないところがあるかもしれませんが、そこは勘弁してください！

空虚な毎日を送る不良中学生の持^じ軽^{かる} 一^{かず}真^まは、突然異次元からやってきた、能天気な中年のおっさん津^つ飼^{がい} 保^ほ土^{つち}と出会い、自分に魔法の力が宿っていることを知る。

やがて、一真がくらす科学界と、保土がくらす魔法界の2つの世界は、500年前に倒された魔王によって狙われていると知る。

一真たちは魔王とその部下たちを倒すため、戦いに挑む！

第1話 俺と渦と学校と

パラレルワールド。

この宇宙に、我々の世界とともに存在しているとされる異世界。

普段、そのいくつもの世界達は、平行線のように、交わることなく影響することなく存在している。

だがある時突然、世界を繋ぐものが現れることがある。それは、物事には始まりがあること、また終わりがあることと同じように、当たり前で、また必然的なことなのである。

学校は…嫌いではない。

両親を亡くした俺に、わずかだが楽しみを与えてくれた場所だ。それに行かせてくれてる叔父にも感謝してる。「楽しい」と思った時もあった気がする。

けど今は「嫌いではない」だ。

何か足りない気がしてならない。一言で言えば「つまらない」だ。もっと広い世界がある。そう思うとどうしても「学校なんて…」となる。

そっついながらも今日も登校する。昨日の喧嘩のキズがまだ痛む。

「けど相手に比べりゃ…」そう思えば大したことはない。

校門を過ぎる。やっぱりいたいた…。いつもの奴。

「よう！一真！今日もいい曲があるぜ！」

（あゝ うっせえな） 心で呟きながら通り過ぎる。

「おい！ちよつとまでよゝ。かゝずまゝ！」

しつこくコピーCDを売ろうとするクラスメイトをシカトしてゲタ箱に向かう俺。ほとんどの連中が、俺に気づくと道を開けていく。

自分の靴を掴む。何度もの喧嘩でもうボロボロだ。

ボロボロは俺に乱暴に履かれ、廊下を進まされる。途中すれ違う教師は誰一人として、止められていない学ランのボタンを注意はしない。教室の戸を開ける。教室の空気が変わる。これもいつものこと、気にはしない。こうして今日も同じように始まる学校生活。全く楽しみはない。

チャイムが鳴り、始まる授業。これこそが俺の学校観を「嫌い」から「嫌いではない」に変えているものだ。教師は「不良のくせに授業は黙ってきく」という変わった生徒に戸惑いながらも、今日の授業を終わらせる。

放課後。特に何もせず帰り道を歩く。なのに今日も目をつけられ、そして喧嘩。もちろん負ける事はない。それでも達成感なんてものもなく、ただ虚しさを感じる。そんな事を毎日繰り返すだけ…。俺の人生はただそれだけ…。

「グワーン！」

突然謎の音があった。と同時に空に巨大な黒い渦が現れた。そのブラックホールのような渦は段々と大きくなり、さらに風が吹きはじめた。まわりの落ち葉が、渦に吸い込まれていく。一真は自分が吸い込まれそうになっているのを感じた。何かいやな予感…。そんな事を考えている間に、風が一段と強くなった。危険を感じ、電信柱にしがみつく。

（ヤバイ！）

風はさらに強まり、もう電信柱は細い枝ほどにしか頼りにならない、と感じるほどの風になった。喧嘩の疲労から電信柱を掴む力がどんどん弱くなっていく。

（もうだめか！）

限界を感じたその時、突如風はやみ、一真はそのまま地面に叩きつけられた。

「イッテ…。」

コンクリートにぶつけた、背中痛みを感じながら一真が起き上がろうとした瞬間、

「ドカツ!!」

第2の衝撃はあまりにも強すぎた。

なんと人が空から落ちてきて、一真はその人の下敷きになっていたのだ！

そして一真の上では中年のおっさんがのびていた…。

第2話 家と爆発とおっさんと

巨大な黒い渦…。

遠い昔に見たことがあるような無いような…。

ハッ！

「目が覚めたか」

変なおじさんが俺を見てる…。一体どうしてこんなことに…ってそうだ！

「お、おっさん空から落ちてきやがった！」

一真がさけぶ。

「あゝスマンね！押し潰しちゃって！いやゝまさかあんなところにパラレルトンネルがひらくとは思わず…。」

マントのような物を身に付けたそのおっさんは、まいったという顔をして言った。

「はあ？何いってんのかサツパリわかんねえよ！」

一真がイライラと言った。

「ん？ああそつかここは科学界だったな！どおりでホウキやじゅうたんが飛んでいないわけだ。」

「人の話きけよ！お前誰なんだよ！」

一真が怒鳴った。おっさんは少し驚いた顔をしたが、すぐに笑って

「私の名前は保士。津飼 保士だ！君は？」

と言った。

一真は少し迷ったが、

「俺は持軽 一真だ。それよりあんたのいつてた科学界ってのはなんだよ！？」

と言った。

「まあ立ち話もなんだから、君の家に行こうじゃないか！」

保土が明るく言った。

「はあ？誰がお前なんか…。」

「いや！君は案内せざるを得ないよ。」

そついうと保土はマントの中から何やら杖のようなものを取り出し、それを一真に向けながら言った。

「リブラス・デルタ！案内せよ！」

「……。」

何も起きない。

一真はもう付き合っても無駄だと思い、家の方に歩き出した。

「おゝい！ちよつと待てよゝ！あれゝおかしいなあ…。」

保土は一真を呼び止めたが、一言だけ言って、そのまま足を進めた。
「近くにいい病院があるぜ！」

家の近くまでくる頃には、もう空は赤く染まり始めていた。周りは家しかない。閑静な住宅街に一真の家はある。電気、ガス、水道もみんな叔父さんが出してくれてる。本当にありがたい。両親がいればもっとありがたいのだろうけど。

玄関の前まで来て鍵が無くなってるのに気づいた。

（しまった…。どこで無くしたかなあ。もしかしてさっきの場所か？けどあそこには戻りたくねえな…。）

さっきの男の顔が浮かび上がる。本当になんだったんだあいつは…。そんな事を思っていると、近くで聞き覚えのある声がした。

「鍵はここにあるぜ！」

声の主を見ると、予想通りさっき思い浮かんだ顔があった。

「なるほどここか！君の家は。いやあい家じゃないか！」

保土が笑って言った。

「おっさん良い加減にしろよ！あんたになんか付き合ってらんねえよ！」

一真がさげぶ。

「おいおいそれはないだろう…。せっかく鍵を持って来てやったのに。」

と保土は元氣なく言った。

「あゝ分かった分かった！どうも！さあ、さつさと返せ！」

一真が怒って言う。

「全く…。君は素直じゃないねえ…。あつ！そうだ！今度こそ見せてやるよ！」

保土は突然思いついたようにそう言うと、また例の枝のようなものを取り出した。

「あゝもう！なんなんだよ！何を見せるってんだよ！」

一真はキレて怒鳴った。だが保土は冷静にただ一言、

「魔法だよ！」

と言うと、ニヤツと笑い、枝を一真の家に向けて、大声で叫んだ。

「リブラス・デルタ！爆ぜよ！」

保土の叫び声とほぼ同時に一真の家は爆発した。

第3話 杖と料理と異世界と

粉々になった家の破片を見て呆然とする一真。その後ろで誇らしげにする保土。沈黙を破ったのは保土だった。

「どうだ！これが魔法の力だ！科学界に住む一真は初めてみただろ！おっと鍵を返し忘れて…」

「何が魔法だー！！俺の家どうしてくれんだよ！鍵必要なくなっちゃったじゃないか！！」

一真は出せるだけの声をありったけ出し怒鳴った。

「まあそうキレるなよ。こんなの魔法の力を持ってすればちよちよいのちよいだ！」

保土がのんきに言う。

「ふざけんな！どうすんだよ俺の家！」

「分かった分かった！リブラス・デルタ！修復せよ！」

例のかけ声と同時に破片がどんどんとの位置に戻っていく。数秒後には、すっかりもとの形に戻っていた。一真はそれをただただ啞然としながら見ていた。

「どうだ！これが魔法の力だ！」

ドヤ顔の保土をみながら、一真はまだ今起きたことの整理が付けられずにいた。

家に入っていく。保土と共に。やはりここまできたら、話を聞かずにはいられない。けどその前に夕飯を食べない事は、もっと出来なかった。

「コンビニで買って来っからちよつと待っててくれ。」

一真がいうと、保土は驚いた顔をして、

「毎日そんな食事なのか？」

とたずねた。一真は当然だ、と言う顔で、

「ああ。」

と短く答えた。

すると保士は突然立ち上がり、

「いかんぞ！食事はバランスよくとらねばいかん！その為には手料理のほうがいいぞ！」

と叫んだ。一真は呆れながら、

「誰が作るんだよ。おっちゃん作れんのかよ？」

と言ったが、保士は平然と、

「いや、作れん！」

と答えた。

じゃあ無理じゃねえか、と言おうとした瞬間、保士はまた例の枝と、

「リブラス・デルタ！調理せよ！」

というかけ声と共に、テーブルの上に、様々な材料を出した。

そしてそれらはそれぞれ浮かびあがり、まな板の上や鍋の中などへ次々と移動していく。包丁やおたまも勝手に動きだし、その様子はまるで透明人間が料理をしているようだった。

「多分20分もすればできるだろう。じゃあ、それまで話をしようか。」

「取り合えずこれは杖っていうもんで、これこそが魔法を出すための道具だ。」

保士はあの枝のようなものを指しながら言った。一真はまだ、隣で自由に動き回っている調理器具に目を奪われながらも、

「それよりまずおっちゃんは誰でどこから来たのかとかの方が気になるんだけど。」

と言った。

「そっか！まあそうだな。一真、『パラレルワールド』って知ってるか？」

保士の質問に、

「聞いた事はある。たしか『この宇宙に、俺らの世界とともに存在

している」とされる『異世界』だっけ？けどあれは空想のものなんじゃないのか？」

と一真が答える。

「いや、この科学界ではそう考えられているが、私たちの魔法界では現実のものとされているんだよ。」

「パラレルワールド」が現実のもの！？　ん？待てよ…

「まさか昼間からずっと言ってる『科学界』とか『魔法界』ってのは…。」

「そう！想像してる通りそれぞれ別の世界、『異世界』だ！」

その時、丁度料理が出来たようだ。料理が乗った皿と箸がスイーッと、一真と保土の前にやって来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1990y/>

俺と魔法と異世界と！

2011年11月11日12時01分発行